

# アメリカ社会科成立期におけるコミュニティ概念に関する考察

—都市と田舎の違いに注目して—

齊藤 仁一郎

学校教育における「社会科(social studies)」という教科は、20世紀初頭のアメリカにおいて生まれたと言われており、その後、日本の戦後の社会科導入にも影響を与えたことで知られている。アメリカ社会科成立期に関する研究は、その多くが都市の社会問題を想定した社会科教育論を研究対象としている。それに対し、本稿では、従来の先行研究ではほとんど取り扱われてこなかった田舎(rural)地域における公民科教科書の特徴分析を行った。その際に分析対象としたのが、当時の代表的な公民科教育者であるアーサー・W・ダンの公民科教科書である。分析の際には、当時の市民育成のキーワードとなっていた「コミュニティ」概念の特徴に着目した。その際に、田舎におけるコミュニティ概念は、都市と比べて、①家族コミュニティの重要性②農業を通じた国家的連帯感、の二点を強調していることが明らかとなった。

キーワード：アメリカ社会科成立期、コミュニティ、Arthur William Dunn、公民科

## I. はじめに

学校教育における「社会科」という教科は、元来、20世紀初頭のアメリカで成立したと考えられている。当時のアメリカにおける社会科成立の背景には、アメリカ東部の大都市を中心とした都市改善運動が影響していると考えられてきた<sup>1</sup>。当時、産業化や移民の流入によって、都市の状況が急激に変化し、その中で、従来大きな役割を担っていた家庭や地域の教育的機能が低下した。しかし、当時のアメリカの大都市が抱える問題を解決するには、従来の教養的な歴史教育では限界が存在した。その結果、学校教育における公民教育が重要な役割を帯びることとなった。その中の一つの打開策として生み出されたのが、市民育成を主な目標とする「社会科」であった。

では、社会科が都市改善を目的として構想されたとすれば、そのような都市問題を比較的考慮せずに済んだとされる田舎(rural)地域では、社会科は必要とされたのだろうか。言い換えれば、社会科成立の背景となった都市問題を抱えない地域では、社会科は必要とされなかったのだろうか。アメリカ社会科成立に関する先行研究では、アメリカ社会科成立に貢献した人々や団体を中心に分析してきた。そのため、主な論点は、東部の都市部を中心としたものとなっており、大都市以外で社

会科がどのような位置づけとして想定されていたかを明らかにしていない。

しかしながら、その後の社会科が、戦後日本にも移植されてきた経緯を考慮すると、日本における社会科が都市改善のために導入されたとは言い難い。さらに言えば、その後の日本の社会科は、アメリカの多文化的な状況や大都市の状況とは異なる状況を歩んできた。このような状況を考慮すると、アメリカの社会科成立過程を分析する際に、大都市における社会科の展開を分析するだけでなく、大都市以外でどのような社会科教育論が展開されたのかを分析する必要がある。

そこで本稿では、20世紀初頭のアメリカにおける田舎地域の社会科の特徴を分析するために、当時、都市と田舎の学校の両方に執筆された公民科教科書を分析する。本稿で対象とする教科書は、アメリカ社会科成立に大きく貢献したとされているアーサー・W・ダンの公民科教科書である。ダンには、社会科成立の画期とされる1916年の社会科委員会報告書の代表編集者になっただけでなく、当時の公民科教育改革を牽引した人物として知られている。また、ダンには、社会科成立期にわたって、都市部や田舎地域、特定の地域における公民科教科書といった多くの教科書を出版した数少ない人物である<sup>2</sup>。本稿では、ダンの作成した都市と田舎の両方の公民科教科書の特徴を分析することを通して、都市を想定した社会科と田舎を想定した社会科がどのように異なっているのかを明らかにする。

## Ⅱ. 都市を想定したダンの公民科教育論の基本的な特徴

### 1. 公民科教育論者ダンとコミュニティ・シヴィックス

アーサー・W・ダン (Arthur W. Dunn) とは、1907年に公民科教科書『コミュニティと市民』を出版し、コミュニティの概念を導入し、身近な社会生活の学習を可能にした人物である。そして、ダンが先駆者となったこの教育論は、その後「コミュニティ・シヴィックス (Community Civics)」と呼ばれて全米に普及し、1916年の社会科報告書においても中核科目として扱われるに至る<sup>3</sup>。ダンには、『コミュニティと市民』を出版以後、全米レベルの公民教育改革で中心的な役割を果たす。そして、それらの活動が評価され、彼は1916年の社会科委員会の報告書全体の編集責任者を務める。いわばダンには、当時の社会科を中心とした公民教育改革の代表的な論者であった<sup>4</sup>。

では、ダンにはなぜ公民科教育改革が必要だと考えたのだろうか。ダンには、「公立学校の機能はシティズンシップの良き見本を作り出すことである。」と述べる。ダンがこのように強調するのは、現在の公立学校の教育目的が、「生計を得るための個人に対する援助の一手段として、しばしば純粹に個人主義的な見方から考えられすぎる」<sup>5</sup>からであった。そして、ダンには、コミュニティ生活の意味とその関係に対する生徒の意識をかき立てられていないと感じていた。その結果、従来の公民科目である「文民政府 (civil government)」がその役割を失敗してきたことを批判する<sup>6</sup>。ただ、ダンには従来の教育を全面的に否定するわけではなく、従来行われてきた政治機構学習を中心とした公民科の学習が、ハイスクールの最終学年で行われるのが適していると述べている。その上でダンには、「コミュニティ生活、シティズンシップの意味、市民とコミュニティとの関係、政治によって市民に対してなされるサービス、といったことに関する初歩的観念は、教育において、(従来の文民政府:筆者注)

より早い時期に生徒に提示することができるし、そうすべきである。」と述べる<sup>7</sup>。このようにダンは、ハイスクール最終学年より早い段階におけるシティズンシップの育成が重要であると考えていた。そしてダンはそのために、低学年における公民科教育は、コミュニティ生活と市民に関する学習を取り入れるべきだと考えていた。

## 2. ダンの公民科教科書におけるコミュニティ概念の特徴

では、ダンの公民科教育論でキーワードとなる「コミュニティ」とは、どのような概念であったのだろうか。ここでは、ダンの『コミュニティと市民』のコミュニティ概念を分析することを通して、都市を想定した公民科の特徴を分析する。ダンはコミュニティの定義について、「コミュニティとは、『一つの場所』と一緒に定住し、『共通の利害関心』によって各々が結びついた『人びとの集団』と考えられる。彼らは『共通の法』に従っている。これはあらゆるコミュニティの定義として使えるだろう。」<sup>8</sup>と述べている。

ダンによれば、コミュニティは、そこに住む人々の数や住んでいる範囲の大小によって様々なものがある。そして、何らかの共通の利害関心やルールを共有している家族や農家集団も都市もコミュニティを構成している。また、州や国家も、共通の利害関心と共通の法によって統治された特定の領域に住む人々で構成されているため、コミュニティといえる<sup>9</sup>。また、それぞれのコミュニティは相互に関係している。ダンは、地域や州、国家といったコミュニティの関係について、「国家は州コミュニティで構成されており、それぞれの州は多くの都市や農家のコミュニティによって編成されている」<sup>10</sup>と述べている。そのため、基本的には、小さなコミュニティを包摂する形で、より大きなコミュニティが存在することとなる。『コミュニティと市民』では、従来、国家や州の政府を前提として網羅的になされてきた政治機構の学習に対し、人々の様々な繋がりやまとまりを理解させる鍵概念として「コミュニティ」という言葉が用いられているのである。

では、コミュニティと個人はどのような関係にあったのだろうか。ダンの公民科教育論では、大小様々なコミュニティは、それぞれが特定の規模における人々の共通の利害関心に関係している。その結果、都市のコミュニティの成員である個人が、農家と都市の物流に共通の利害を感じた場合に、都市を超え農家を含むより大きなコミュニティの成員にもなる。また、州や国家レベルでの物流や貯蓄を共通利害とした場合、個人は、州コミュニティや国家コミュニティの成員でもあることとなる<sup>11</sup>。つまり、一人の個人が異なるコミュニティの成員としての側面を同時に持ち合わせるることとなる。

また、国家レベルと地域レベルのコミュニティの利害関心は異なったものである。例えば、人間に不可欠な健康に関する、地域レベルの共通の利害関心は、街の基本的なライフラインの整備等であるのに対し、国家レベルの利害関心は、外国からの疫病の流入防止や国防等を指す場合もある<sup>12</sup>。そのため、単純な地域の利害関心の総和が国家コミュニティの利害関心になるわけではなく、異なったコミュニティに応じて利害関心が存在する。個人はそれぞれの利害関心に応じて、それぞれの成員として関わっているわけである。

さらにダンの公民科教育論では、そのような個人とコミュニティの異なった関係性を捉える上で、各コミュニティで形成される法の存在が重要な役割を果たす。なぜならば、人々が特定の規模の集団が共通の利害関心を持っていることを意識した際に、その利害関心を調整するような何らかのルールを設定すると考えられているからであった。例えば、開拓家族において父親に権威があり、父親の言うことが家族のルールであったことや、開拓期に必要なに応じて近隣や地域において決まりを作るようになったことなどを挙げられている<sup>13</sup>。このような家族や地域における法や政治の原型のイメージが、社会の発展に伴って、州や国家規模での政府や法律が作られるに至る。ダンはその過程を歴史的に論じている。このようにダンの公民科教育論では、個人は、ある特定の範囲の地域や集団において、共通の利害関心を達成するために法や仕組みを形成し、それらのしくみを用いることによって、それぞれのコミュニティの成員として関与していると考えられている。

このように、ダンのコミュニティ観は、共通の土地、共通の利害関心、共通の法に基づいて構成され、家族や近隣から国家といった多様な集団において適用されるものであった。

しかし、ダンの公民科教科書で論じられる大半の内容自体は、地域や州、国家における公的機関としての政府が、自分達の日々の生活にどのように関係しているかを示すものとなっていた。では、なぜコミュニティの学習において、公的機関としての政府が重要となるのか。それは、社会が複雑化するにつれて、コミュニティの人々の共通の利害関心が実感しにくくなり、人々の持つ欲求の対立が起きやすくなるからであった。ダンは「あまりにも多くの欲求とあまりにも多くのそれを満たす方法がある場所で、しばしば人々の活動が対立することは不思議なことではない。」と述べる<sup>14</sup>。複雑化したコミュニティに生じる対立を調整するために、ダンは、「そのような不十分な状況においては、個人ができることよりも思慮分別のあるいくつかの機関が存在しなければならない。それによってまさに、すべての知的活動を首尾一貫して確保することができるのである。そのような政府機関が意図されているのである」と述べる<sup>15</sup>。コミュニティ成員が協力する手段としての政府や法律は極めて重要なものであった。

このような社会観を形成する背景となったのが、急激な都市化を遂げるコミュニティの存在である。『コミュニティと市民』では、コミュニティの状況を説明する際に、多くのコミュニティが開拓民時代から、農村社会、都市化へと段階的な発展を遂げていたことが説明されている<sup>16</sup>。実際、ダンの『コミュニティと市民』の大部分の記述は、入植時代から現代へとコミュニティの歴史的な発展を示すものとなっていた。

また、ダンは後半の政治機構学習に教科書の三分の一の量を費やし、公的政治プロセスや政治機構の学習も重視している。ダンは20章「コミュニティ自治のいくつかの問題点」において、「人々による人々のための誠実で有能な政府を保証するために最も重要なことは、政治に積極的に参加するための投票権を持つ全ての良き市民自身の存在である。」<sup>17</sup>と述べている。ダンは、コミュニティにおける公的機関の活動を重要視していたが、最終的には市民一人ひとりがコミュニティの政治に関心を持ち、投票を中心とした公的政治参加が重要だと考えていた。ダンがそのような公的政治参加を重視したのは、コミュニティが政府や法によって共通の利害関心を共有するものとなっているた

めであり、公的政治参加を通じて市民がコミュニティの共通の利害関心についての決定に関わることができるからであった。

### 3. 統合原理としてのアメリカ的な価値

これまで見てきたように、ダンの公民科教科書では、個人が様々なコミュニティと多元的な関係にあり、日常生活でも様々なコミュニティの成員としての役割を担っているとされた。また、その際に、コミュニティの共通関心を認識するために、法や政府が重要な役割を担っていた。では、ダンのこのような多元的なコミュニティの見方にとって、国家としてのまとまりは単なる一つのコミュニティに過ぎなかったのだろうか。

結論から先に言えば、ダンの公民科教科書におけるコミュニティの多元性を維持するために軸として用いられたのが、アメリカ合衆国憲法の価値であり、アメリカ人としての自覚であった。個人は家族、地域、州、国家から世界へと広がる様々なコミュニティに対し、絶えず「アメリカ人として」関わっているのである。そして個人は、近隣や地方、州、国家等で異なる利害関心と共に生きているが、その前提には、アメリカ合衆国憲法の普遍的な価値とアメリカ的理念が存在した。ダンは、『コミュニティと市民』の「7章 アメリカ人の形成」において、「もし彼ら（移民達：筆者註）が私達のコミュニティの価値ある成員であるならば、彼らが私達アメリカの信条に十分な共感を持たなければならないということは明らかである。彼らは彼等の生活の中でアメリカの大衆と溶け込み、単に服装や言語だけでなく、彼等の精神や原則においてもアメリカ人となる。」<sup>18</sup>と述べている。

このように、ダンは、外国人がアメリカに来る場合、どのコミュニティと属するかという選択以前に、アメリカの信条、原則、精神に共感しなければならないことを指摘している。また、ダンはコミュニティの人々の欲求を論じる際、それらの欲求を満たす権利が合衆国憲法で保障されていると指摘する<sup>19</sup>。そのため、個人は利害関心に応じて多元的なコミュニティと関わるが、そのコミュニティ観は「アメリカ人として行動すること」を前提とし、その価値基盤をアメリカ的理念に据えられているのである。

では、ダンのコミュニティ観がアメリカ合衆国の政治理念や憲法的価値を前提としていた場合、それらの理念を共有していない世界との関係をどのように捉えられていたのだろうか。これに関して、ダンは『コミュニティと市民』では世界とアメリカの関係について触れていないが、後の『コミュニティ・シヴィックスと田舎生活』において、新たに「世界コミュニティ」に章を設けて、ダンの公民科教育論の世界レベルへの援用を試みている。

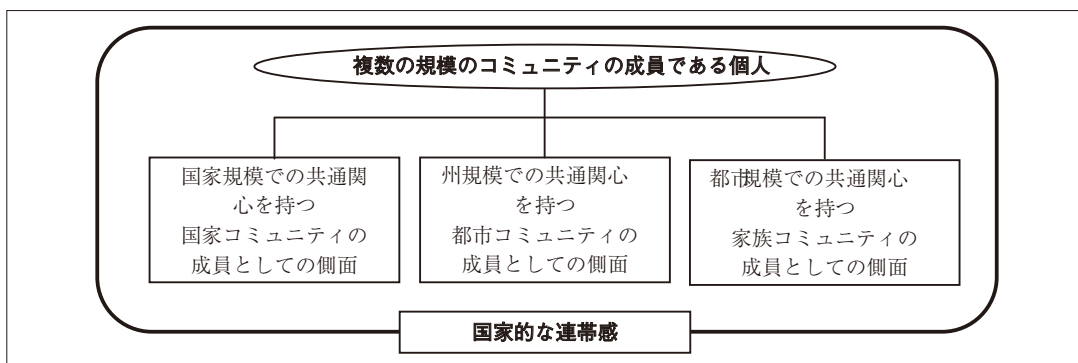
ダンによれば、世界も他のコミュニティと同様にコミュニティとして捉えられる。第一次世界大戦によって、人類同胞への親近感は強まったものの、世界コミュニティ自体は現時点ではまだ存在していないと指摘する<sup>20</sup>。これまで世界の人々は、言語、人種、肌の色や宗教、信念などの違いが障害となって、共通の欲求や目的に関する感覚を発達させるのに長い時間がかかってきたが、第一次大戦を通して、世界の各国が世界共通の利害関心を認識しつつある<sup>21</sup>。また、「共通の利害関心のために各国の効率的な協力を維持し、戦争における各国の意見の対立を和解させる手段として調停

役を設けるためには、国際機関のようなものや各国の政府が同意する法律が存在しなければならない<sup>22</sup>。」と述べるように、最終的には世界レベルでの法や政府機能が必要であると考えていた。

ただ、ダンは国際間の友好を守る各国の連盟が生まれる際に、国籍や国家的愛国心を弱めるのではなく強める必要があることを指摘する<sup>23</sup>。そしてその後、「“アメリカが第一”とはどういう意味か」という小項目において、完全な近隣生活を確保する唯一の方法は、第一に、近隣生活における各家庭が強く健全であると理解することであることや、国家の強さは、それを構成する州の強さに依存していることを指摘する。その上で、「有用な世界政府の樹立に向けた本質的な第一歩は、同時に私たちの国家政府は有用であると理解することである。市民が世界コミュニティに対してなしうる最初にして最善のサービスは、アメリカ的理念、すなわち、世界人類の一部で徐々に増えつつある理念に忠誠を尽くすことである<sup>24</sup>。」と述べるのであった。このようにダンは、自分の家庭に忠誠を示せて初めて近隣に忠誠を尽くせること、それと同様に世界コミュニティの発展が国家コミュニティへの忠誠によって成り立つことを強調する。つまり、個人は世界コミュニティと独立して関わっているのではなく、「アメリカ人として」世界コミュニティに関わっているのである。ここでのダンの主張は、アメリカ的理念が世界に広がりつつあること、言い換えればアメリカの理念が世界に広がる普遍性をもつことを前提に論じられている（【図1】）。

#### 4. 都市を想定したダンの公民科教育論の特徴

ダンの公民科教育論は、コミュニティを共通の土地とそこから生じる共通の利害関心および法によって構成されるものと捉えていた。そして、個人は共通関心に応じて様々なコミュニティとかわり、成員としての参加が求められた。また、自分とコミュニティの関係を理解する上で、重要なのがコミュニティと対になる法と政府であった。それゆえに、ダンの公民科教育論では、法律や政府活動の意義を理解することが重視された。そして、各コミュニティの関係では、アメリカ的理念を共有する国家コミュニティは特別な位置づけであると考えられていた。このように、ダンの公民科教育論は、アメリカ人としての国家的アイデンティティを基盤とし、それぞれのコミュニティの政治原理を通して市民育成をするものであった。また、このようなコミュニティの想定は、主に当



【図1】公民科教科書『コミュニティと市民』におけるコミュニティ概念（筆者作成）

時の都市の状況を想定して論じられていた。

### Ⅲ. 公民科教科書『コミュニティ・シヴィックスと田舎生活』の特徴

#### 1. 本教科書の作成意図

ダンは、先に示したようなコミュニティを基盤とした公民科教育論を構想していた。しかしながら、ダンの公民科教育論におけるコミュニティや市民の状態は、ダン自身が認めているように、主に都市を想定したものであった<sup>25</sup>。それは、コミュニティは従来の単純や状況から、産業化や移民の流入を背景とし、急激な人口増加を遂げる都市において、コミュニティとしての機能や人々の依存関係が見えにくくなったコミュニティの様子であった。

では、コミュニティの状況が異なる田舎地域では、どのような公民科教育が想定されていたのだろうか。ダン自身のこのような問題意識から作成されたのが、公民科教科書『コミュニティ・シヴィックスと田舎生活』(以後、『田舎生活』と略称)である。それに関して、『田舎生活』の目次一覧をまとめたものが、次の【表1】である。

【表1】『コミュニティ・シヴィックスと田舎生活』の目次一覧

『コミュニティ・シヴィックスと田舎生活』		
目次内容	1. コミュニティ生活における共通の目的。	14. 人民と土地の関係
	2. コミュニティ生活において、私達はどのように他者に依存しているのか。	15. 天然資源の消費
	3. コミュニティ生活における協力の必要。	16. 生存と財産に関する権利の保護
	4. なぜ私達は政府を持つべきなのか。	17. 道路と輸送
	5. シティズンシップとは何か。	18. 交際
	6. 私達のコミュニティとは何か	19. 教育
	7. 私達の国家コミュニティ。	20. コミュニティの健康
	8. 世界コミュニティ	21. 社会的, 美的, 精神的な欲求
	9. 家庭	22. コミュニティにおける障害者, 被扶養者, 過失者。
	10. なぜ政府が家庭作りを手助けするのか。	23. 税制における協力。
	11. 生計を立てる。	24. 私たち自身をどのように統治しているのか
	12. 農業の協力手段としての政府	25. 私達の地方政府。
	13. 節約	26. 私達の州政府。
		27. 私達の国家政府。

(Arthur W. Dunn., *The Community civics and rural life*, D. C. Heath & Co.1920. より筆者作成)

ダンが本教科書を作成しようと試みた理由の一つが、大都市のような環境の外で生活する生徒や教師の必要性を満たす教科書を作成することであった。ダンによれば、民主主義におけるシティズンシップの育成は、都市でも田舎でもすべてのコミュニティにおいて、本質的に同様の過程をたどる。しかし、それが本当に市民の生活において機能するならば、この過程は、彼らが認識している実際の市民的状況から生み出される教育的価値にもとづいて、大部分が構成されねばならない、とされる<sup>26</sup>。実際、ダンも述べるように、「アメリカの若き市民の半分は、本質的には田舎の環境に住んでいる」のであり、ダンは、彼らの背景となる経験や市民指導における必要性は、都市市民のそれとは多くの点において異なると考えていた<sup>27</sup>。

また、本教科書には、編集者のハロルド・W・フォウト (Harold W. Fought)の紹介が書かれている。

その中で、フォウトは、「田舎生活と、生徒が田舎での多くの体験をするだろう学校は、それらがシティズンシップ育成のためにすべきことを十分にはしていない。」と述べる。その理由は、これまでの田舎における教育は、「教科書が生徒の経験に即してシティズンシップや政府という用語を解釈説明すること」「田舎という背景に特徴的なコミュニティにおける協働作業やリーダーシップを刺激すること」「多くの田舎の学校と同様に、一つの国家的事業における田舎と都市のコミュニティの相互依存関係を強調すること」の三点に失敗してきたからだとされる<sup>28</sup>。それらの問題を解決するために出版された公民科教科書が本教科書であった。

## 2. 本教科書の記述の特徴

### i) 家族コミュニティの重要性

では、『田舎生活』の記述では、田舎におけるコミュニティの特徴がどのように描かれているだろうか。もちろん、本教科書では、田舎生活の様子を考慮した記述が多く見られるが、本稿では、その中でも、コミュニティ概念に注目して分析を行う。

田舎での生活は、ダンが「農業コミュニティにおいて、人々の協力関係は、都市よりゆっくりと発展してきた」と述べるように、都市と比べると田舎では人々の協力関係が見えにくいとされる。そのような人々の関係性が見えにくい田舎コミュニティにおいて、特に重要とされたのが、各家族単位のコミュニティとしてのまとまりであった。それに関してダンは、「家庭は、田舎コミュニティでは特に重要である。田舎の家は、もはや開拓者の家のように孤立し個々独立しているわけではないが、田舎市民の生活は都市住民の生活よりも家庭内の努力に依存している度合いが強い。」と述べる。実際、家族の生計を確保している農場の仕事は、家族の全てのメンバーに何らかの役割が与えられており、他のどの近代的な産業よりも大きな程度で、家族の協力によってなされる事業でとなっていた<sup>29</sup>。

また、田舎コミュニティにおいて家族コミュニティが重要であるということは、日常生活の様々な点においても、家庭においてシティズンシップを学ぶ機会が多いことを意味していた。例えば、ダンは、アメリカの田舎生活においては、初等学校や場合によってはハイスクールにも通学困難な田舎コミュニティが存在することを考慮している。ダンは、「しかし、田舎の学校で提供される教育が最善かどうかに関わらず、農場の少年少女は、農場生活の様々な職業を通して、都市の少年少女が味わうことのできない種類の教育を多く受けている。私たちの国の多くの成功した男女が農家育ちであることは注目に値する。そして彼らは、そこで受けた訓練の価値に対する機知を常に持っている。そのため、健康や社会生活、レクリエーション、心地よく美しい環境に関する事柄に関して、田舎の家庭は、大部分において自分たちの家庭自身に依存しているのだ。」と述べる<sup>30</sup>。実際、コミュニティの美観に関しても、都市では、政府や法律によって管理がなされているのに対し、田舎では、個人や家族にその責任が任されていた<sup>31</sup>。同時に、コミュニティの公衆衛生に関しても、都市では専門の役人が配置されているのに対し、田舎コミュニティでは、それらの問題の大半が、各家の家主に任されていた<sup>32</sup>。これらの記述は、どれも田舎コミュニティにおける家庭の重要性を強調する



ものであった。

このように、『田舎生活』を見ると、健康や社会生活、レクリエーションなど様々な問題に関して、都市では政府の役割が強いのに対し、田舎生活では、家族や家単位のまとまりが重視されていたことが分かる。

## ii) 農業を通じた国家的連帯感の強調

先に示したように、田舎コミュニティにおいては、家族コミュニティの重要性がとりわけ指摘されていた。では、田舎では、コミュニティにおける政府の役割は大きくなかったのだろうか。それに関して、田舎生活の多くの記述は、田舎の主な産業である農業に関して、政府の援助がなされることが説明されている。

例えば、農業に関しては「国家事業としての農業」という小項目が設けられており、その中で、「ある州の農業局における質の低いサービスは、その州の農家に有害だけでなく、他の州の農家や国全体にも有害なのである。…(中略:筆者)…我が国の農業は、偉大な国家的事業として見なされなければならないのであって、48個の別々の事業と見なされるべきではない。」と述べられる<sup>33</sup>。

このような農業を基盤とした国家との関連性に関して、都市や他の地域とを結ぶ輸送・伝達の役割が大きく重視されている。例えば、「良い田舎道は、農家や田舎コミュニティにとってだけでなく、都市の人々にとっても重要である。スポットシルバニア郡やバージニアの道路の発達には、農家の人と同様に、フレデリックスバーグの商売にとっても大きな利益をもたらすのだ。」と述べられ、農村部の道路改善が都市部の商売にも影響を与えることが指摘されている<sup>34</sup>。このスポットシルバニア郡の例として、異なる二つの地区の道路改善が、二つの地区とは別の農家にも直接的な利益を与えること、そして、その発想を進めると、ある郡の道路が同じ州の他の郡にとっても重要であること、も示されている<sup>35</sup>。また、「農家の市場とその供給源は、単に近隣の流通センターにあるということではなく、国や世界の遠く離れたところまで及んでいる。鉄道がないと、農家、製造者、そして都市の商人は、無力になったようなものだ。」と述べられている<sup>36</sup>。さらには、「速達電車が発達し、貨物自動車サービスが導入されることで、都市と田舎の郵送サービスの向上に向けた、重要な第一歩となる。」とも述べられている<sup>37</sup>。

このように、『田舎生活』では、田舎コミュニティと都市や国全体を結ぶ問題として、農業の国家的重要性が強調して論じられていることが分かる。その中では、同じ田舎同士のつながりよりも、そこで生産された農作物がアメリカ全土に影響を与えていることが強調して示されている。そして、農業の流通を理解するうえで、道路や通信技術といった様々なコミュニケーション手段の重要性が理解される展開となっている。このように、田舎の生活において家族と並んで強調されるのは、農業を通じた国家的なつながりであった。

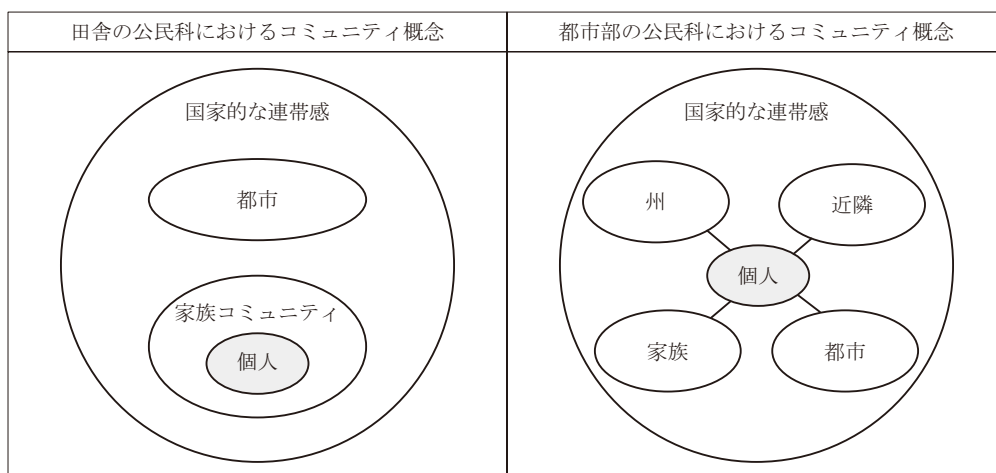
## 3. 『田舎生活』におけるコミュニティ概念の特徴

これまでに述べたダンの『田舎生活』におけるコミュニティ概念の特徴を、先に考察した都市のコ

コミュニティ概念と比較したものが次の【図2】である。

まず、都市のコミュニティ概念は、個人を起点として、共通関心に依じて個人がコミュニティと多元的に関わるというものであった。そして、それらのコミュニティ概念をまとめるのが、アメリカ合衆国憲法の価値を軸とした国家的な連帯感である。それに対して、田舎におけるコミュニティ概念は、都市ほどの多元性を持っていない。むしろ、目の前の社会問題が少ないこともあり、家族コミュニティの重要性、また都市との関係性を軸に論じられている。そして、最終的には、田舎においても、国家的連帯感を重視したものとなっている。

このように、ダンが作成した公民科教科書においては、都市と田舎で異なった特徴を持つコミュニティ概念が用いられていた。このような差異は、コミュニティを重視した公民科が、本来、都市部で起こる社会問題を改善する運動の中で作り出されたのに対し、社会問題の生じにくい田舎に公民科を適用したゆえに生じたものだと思われる。



【図2】ダンの田舎と都市の公民科教科書におけるコミュニティ概念の違い（筆者作成）

## VI. おわりに

これまで本稿で明らかにしてきたとおり、ダンの教科書『コミュニティ・シヴィックスと田舎生活』の分析を通して、田舎用の公民科教科書は、都市の一般的な公民科教科書と比べて、二つの異なる点があることが明らかとなった。その二点とは、第一に、田舎の公民科が都市と比べて家族コミュニティを重視しているということである。第二に、田舎の公民科が農業を通じた国家的な連帯感を強調しているということである。

ダンの従来の公民科教育論では、市民がコミュニティの原理を理解する必要性があるのは、コミュニティの発展に伴って人々の利害衝突が増えてきたからであった。一方で、『田舎生活』では、人々の利害衝突が多い都市の問題とは異なり、家族を軸としたコミュニティ概念の理解を深めるものとなっていた。これによってダンは、都市の社会問題とは関係の薄い田舎に住む市民に対しても、コ

コミュニティ生活の理解を促そうとした。そして、その結果として、家族コミュニティと共に強調されたのが国家的連帯感であった。つまり、緊急の社会問題が見えにくい田舎の人々に対し、ダンが講じた工夫というのが、田舎の問題が国家的問題と深くかかわっていることを強調することであった。コミュニティ・シヴィックスは、本来、個人が多面的なコミュニティの成員であることを理解させる公民科教育論である。実際、ダンの都市での公民科教育論では、そのような多元性を確保しようとする特色が強く表れている。しかしながら、田舎用の公民科を構想する場合、現実の状況を踏まえると、家族と国家の関連性を強調する傾向が強くなったのではないだろうか。この問題は、シティズンシップ育成を重視する社会科は、目に見えた社会問題が目の前にあることを前提として論じる傾向があること、その社会問題が見えにくい場合、国家と個人を結び付けやすいこと、を示しているように思われる。

従来の先行研究では、20世紀初頭のアメリカ社会科の成立に関して、その後につながる社会的な実践やカリキュラムの発展に目を向けて分析する傾向があった。しかしながら、ダンも述べているように、これらの成立期社会科が当時のアメリカ全体の状況を映し出していたわけではなく、一方には多くの田舎地域に住む人々が存在したのであった。当時のアメリカ社会科が、コミュニティや地域とともに作られたのだとすれば、各地域の特色や文化を投影した形で、カリキュラムは作られる。そのような地域ベースの社会科論を分析する際には、単に都市部で社会科運動が活発だったからといってそれらに限定した分析を行うことはできない。今後、それぞれの異なる地域において、どのようなニーズのもとにカリキュラムが作られたのかについて、より詳細な分析が必要とされている。また、本稿では、田舎における公民科教育論の特徴を見るために、ダンの教科書を分析したが、今後は、田舎地域において、実際にどのような社会科改革が行われていたのかを、実証的に分析していく必要がある。

## 【註】

- 1 森分孝治『アメリカ社会科教育成立史研究』風間書房、1994年。
- 2 実際、ダンの公民科教育論を取り扱った先行研究は成立史研究に多く存在する。アメリカの研究で代表的なものとして、トライヨンの研究(Rolla M. Tryon., *The Social Sciences as School Subjects*, The Scribner Press, 1935.)、サックスの研究(David. W. Saxe., *Social Studies in Schools: A History of The Early Years*, State University of New York Press, 1991.)やルーベンの研究(Julie A. Reuben., "Beyond Politics: Community Civics and the Redefinition of Citizenship in the Progressive Era", *History of Education Society, History of Education Quarterly*, vol. 37, No.4, 1997 winter, pp.399-420.)が挙げられる。また、わが国では、三浦(三浦軍三「A Study of the Contribution of Arthur William Dunn to American Civic Education Birth」『香川大学教育学部研究報告(第一部)』第43巻、1977年。)、溝上(溝上泰「[Community Civics]の性格」日本社会科教育研究会『社会科研究』第30号、1982年。)、安藤(安藤輝次『同心円的拡大論の成立と批判的展開』風間書房、1993年。)、森分(森分孝治『アメリカ社会科教育成立史研究』1994年、風間書房。)の研究がそれに当たろう。

しかしながら、これらの先行研究では、田舎用のダンの教科書に注目し、田舎独自のコミュニティ・シヴィックスの特徴分析はなされていない。

- 3 N.E.A., *The Social Studies in Secondary Education, Report of the Committee on Social Studies of the Commission on the Reorganization of Secondary Education of N.E.A.*, U.S. Bureau of Education, Bulletin, 1916, No.23.
- 4 例えば, Patricia Glasheen, *The Advent of Social Studies, 1916, An Historical Study*, Boston University School of Education, Dissertation, 1973. 等。
- 5 Arthur W. Dunn, *The Community and the Citizen*, D. C. Health & Co., 1907, p. iv.
- 6 *Ibid.*, p. iii.
- 7 *Ibid.*, p. iii.
- 8 *Ibid.*, p.7.
- 9 *Ibid.*, p.7.
- 10 *Ibid.*, p.8.
- 11 *Ibid.*, p.8.
- 12 *Ibid.*, pp.54-66.
- 13 *Ibid.*, pp.23-24.
- 14 *Ibid.*, p.18.
- 15 *Ibid.*, p.161.
- 16 *Ibid.*, p.43.
- 17 *Ibid.*, p.185.
- 18 *Ibid.*, p. 39.
- 19 Arthur W. Dunn., *The Community civics and rural life*, D. C. Health & Co.1920, pp.9-10.
- 20 *Ibid.*, p.86.
- 21 *Ibid.*, p.88.
- 22 *Ibid.*, p.92.
- 23 *Ibid.*, p.95.
- 24 *Ibid.*, p.96.
- 25 *Ibid.*, p. iii.
- 26 *Ibid.*, p. iii.
- 27 *Ibid.*, p. iii.
- 28 *Ibid.*, p. ix.
- 29 *Ibid.*, p.102.
- 30 *Ibid.*, p.102.
- 31 *Ibid.*, p.343.
- 32 *Ibid.*, p.319.
- 33 *Ibid.*, p.146.
- 34 *Ibid.*, p.257.
- 35 *Ibid.*, p.259.
- 36 *Ibid.*, p.265.
- 37 *Ibid.*, p.281.

# A Study on the Concept of Community in the beginning of American Social Studies :

Focusing on the difference between city and rural

Jin'ichiro SAITO

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

This paper aims to describe the feature of Civics educational theory in the beginning of American Social Studies. Most researchers focused on the social studies theory in the urban area. In the early 20th centuries USA, school subject "Social Studies" was introduced in the secondary school. And, in the background, there were social problem of the City. But, in those days, half of American students lived in rural area. So, we also need to research on the social studies theory in rural area.

For this research, this paper selects the Textbook of Civics that made for rural area. And, this paper focuses on the concept of community, emphasized in social studies of an early days.

In conclusion, this paper describes that there was difference between civics in city and civics in rural area. Civics in rural area emphasized the importance of family and national relationship.

Keywords : beginning of American Social Studies, Community, Civics

